

## 資料紹介：法華七喩が書かれた経板

資料課 松尾史子

### 1. はじめに

本稿では、令和4年度夏の企画展「あやしい丹後」において展示したお経が墨書された陶板について、資料調査の過程で明らかになった墨書の内容を紹介する。

### 2. 資料の概要

本資料は、旧京都府立網野高等学校所蔵で当館に寄託されている資料である。残念ながら出土地や時期については不明である。

陶板の形状は縦約16cm・横18cmの方形で、厚さ1.5cmを測る。粘土塊から板を切り出し、両面および全ての端面をケズリで調整し、磨いている。焼成は堅緻であるが、火まわりの悪い瓦の状態に近く色調は赤褐色である。上部と右側の端面は強く火を受けたためか黒褐色を呈している。陶板の両面には幅約0.5mm、縦13本、横12本の線刻により1.4cm四方のマス目状の罫線が引かれており、マス目の中には文字が墨書されている。片面あたりの文字数は11文字×12行で合計220文字である。文字の書体は楷書で、表面は明瞭に残っているが、裏面は4分の3が消えて不明瞭となっている。

罫線の凹み部分の色調と板の生地の色調が同じであること、墨書の上からの傷の状況とよく似ていること、罫線の凹みに墨が入っている部分が見られることから焼成後に罫線が施され、その後文字が書かれたと考えられる。

### 3. 墨書の内容

さて、気になる墨書の内容であるが、法華經に説かれている7つのたとえ話、法華七喩の1つ目の話であることが明らかになった。その話とは法華經譬喩品にある「三車火宅」で、とある長者が火事になった家から逃げようとしないうる3人の子供を救い出す為にそれぞれが好きな物を与える約束をし、無事に逃げた後にもっとよい物を与えたと

いうものである。原文は以下のとおりで、陶板に墨書されている部分は11文字×12行で表した。下線は文字が確認できる部分である。

法華經卷第二譬喩品第三より抜粋

「…(前略)長者。見是大火。從四面起。即大恐怖。而作是念。我雖能於此。所燒之門。安穩得出。而諸子等。於火宅内。樂著嬉戲。不覺不知。不驚不怖。火來逼身。苦痛切己。心不厭患。無求出意。舍利弗。是長者。

<表面>

作是思惟。我身手有力。当以衣被。若以几案。從舍出之。復更思惟。是舍唯一門。而復狹小。諸子幼稚。未有所識。恋著戲處。或当墮落。為火所燒。我当為說。怖畏之事。此舍已燒。宜時疾出。無令為火。之所燒害。作是念已。如所思惟。具告諸子。汝等速出。父雖憐愍。善言誘諭。而諸子等。樂著嬉戲。不肯信受。不驚不畏。了無出心。亦復不知。何者是火。何

<裏面>

者為舍。云何為失。但東西走戲。視父而已。爾時長者。即作是念。此舍已為大火所燒。我及諸子。若不時出。必為所焚。我今。当設方便。令諸子等。得免斯害。父知諸子。先心各有好所。種種珍玩。奇異之物。情必樂著。而告之言。汝等所可。玩好。希有難得。汝若不取。後必憂悔。如此種種。羊車。鹿車。牛車。今在門外。可以遊戲。汝等於此火宅。宜速出来。隨汝所欲。皆当与汝。爾時諸子。聞父所說。珍玩之物。適其願故。心各勇銳。互相推排。競共馳走。争出火宅。(後略)・・・」

法華經の文字数は全部で69,384文字あり、全てを書写するには同様の板が158枚必要となる。



写真1 経板：表面

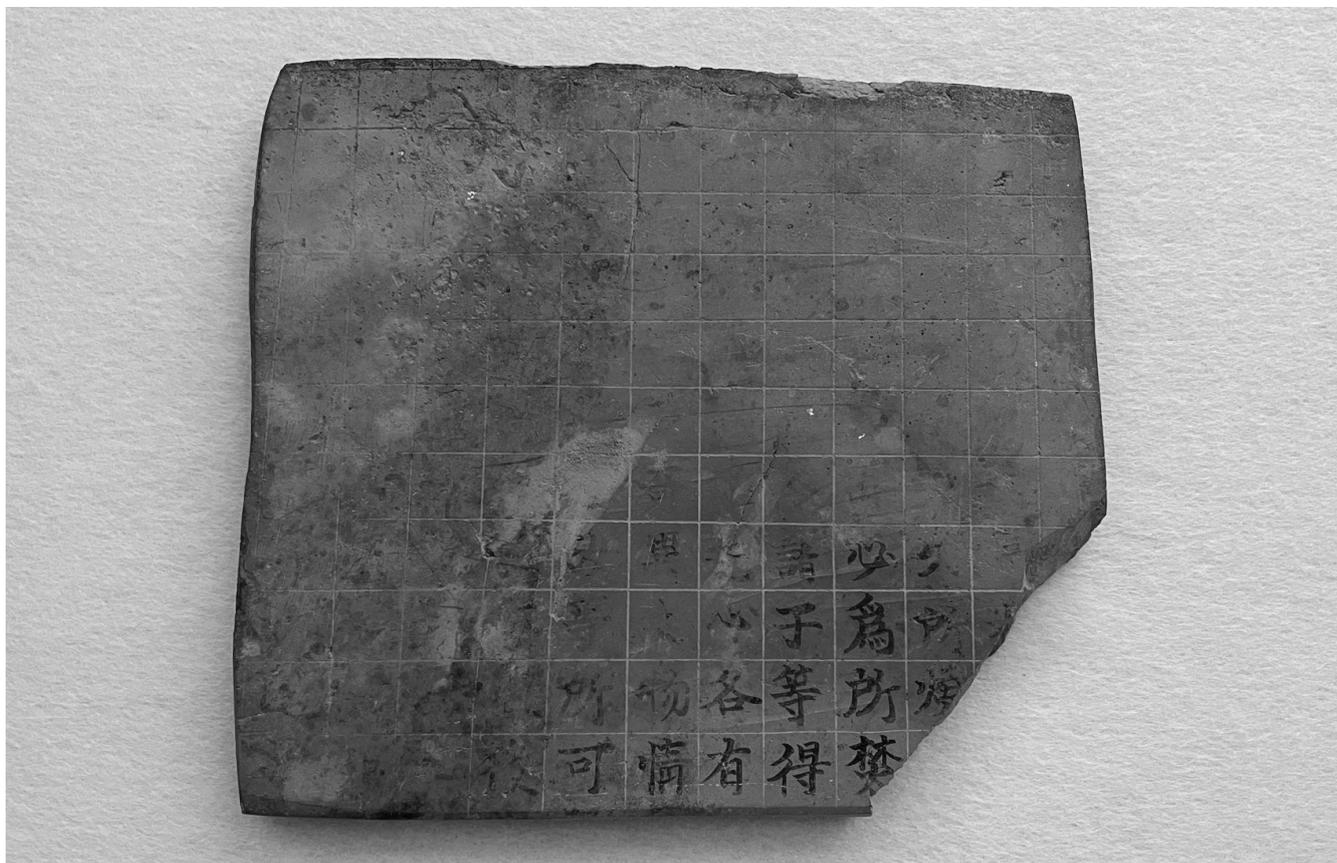


写真2 経板：裏面

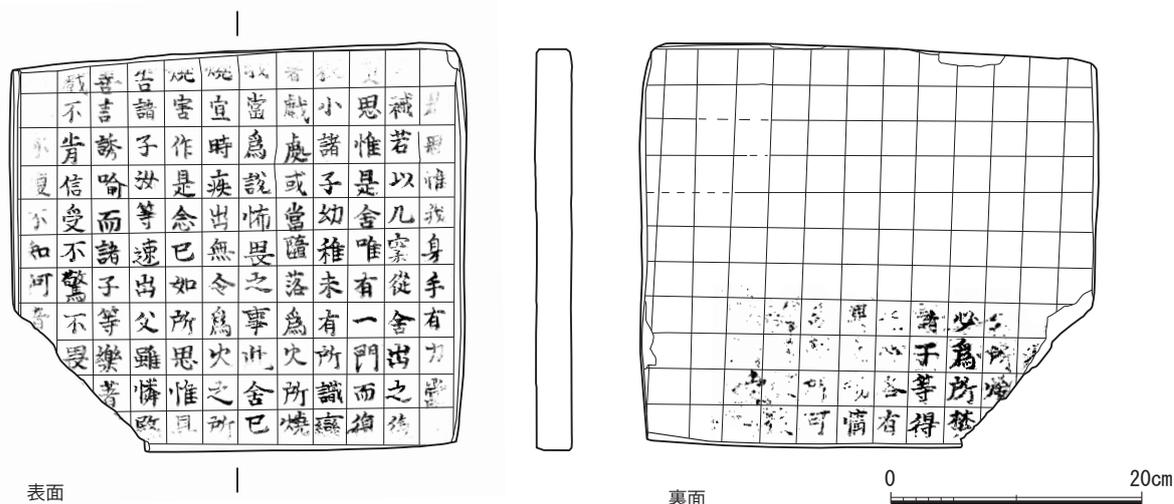


図1 経板実測図 (s=1/3)

本資料は「三車火宅」の途中から始まり、途中で終わっているため、前後に何枚かあったことが想定されるが、残念ながら当館に寄託されている本資料のほかにもどのくらい同様の板があったのか等詳細については不明である。その書写に当たり法華経の全てが書写されたのか、一部のみであったのかについても謎のままである。

4. おわりに

お経が書写されたものとしては紙本経が一般的であり、それ以外には瓦経、こけら経、礫石経などがある。これらは経塚に埋納されることが多く、本資料も経塚に埋納されたものである可能性もあろう。

ここで本資料とこれらとの違いを確認しておこう。瓦経は粘土板に縦罫線とお経を線刻して焼いたもので、平安時代から鎌倉時代に盛行した。本資料との大きな違いのひとつは罫線と文字が焼成前に線刻されていることである。こけら経は薄い木の板にお経を墨書きしたもので、中世に盛行した。礫石経は河原石にお経を1字または複数字で墨書きしたもので、近世に盛行した。複数字の場合は石の両面にびっしりと墨書される。

いずれも法華経が書かれることが多く、礫石経以外は1行17文字であることが多い。

このように経塚出土遺物と比較すると形態は瓦

経が最も近いようであるが、1行の文字数にこだわらず墨書きする点では礫石経のほうに近い。

現時点では類例が見当たらないが、本稿をきっかけに情報提供があることを期待したい。

最後に本稿執筆にあたりご助言・ご教示いただいた杉原和雄氏、森島康雄氏、鈴木景二氏、山本崇氏に記して感謝いたします。

参考

- ・特別展『経塚 丹後とその周辺』図録 1977 京都府立丹後郷土資料館
- ・『丹後郷土資料館収蔵目録』第1集 1980 京都府立丹後郷土資料館
- ・SAT大正新脩大藏経テキストデータベース <https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>